

夏がくれば、思い出す。

それは、森の深い緑がむせるように薫った季節。

悠久の時、無限の空を隔てた、遙か遠い時空の出来事。

それでもなお、彼女は咲夜の胸の中に生き続けている。

——水丹。

それが、彼女の名前。



咲夜が物心ついた頃には、傍らには既に此花水丹がいた。

父親は此花家に住み込みで働く執事で、水丹より二歳年下の

咲夜は、彼女の遊び相手にうってつけだった。

名家で何不自由なく育った水丹は、良く言えば天真爛漫、悪

く言えば傲岸不遜。お転婆で我がままで、無邪気で奔放。

咲夜が困らせられることも多かった。

「咲夜、馬になりなさい」

そう言われれば、長い廊下を水丹を乗せて、四つん這いで歩いた。

「咲夜、あの木に登るから、手伝いなさい」

此花邸の広い庭には、大きな桜の木があつて、春には綺麗な花を咲かせていた。

水丹の父親が大事にしている木で、咲夜の父がよく手入れをしている。枝でも折ろうものならば、きつと怒られる。

「やめて下さい、お嬢様。旦那様に叱られます」

「まあ、咲夜ったら意気地なしね。瑣末なことを気にかけて」

そう言うと、水丹はゴツゴツとした幹に手をかけ、足をかけてスルスルと登っていく。

太い枝に腰をかけると、

「どう、咲夜。あなたに登ってこられるかしら」

咲夜は高くて怖いのと、大人に見つかつて叱られるのが怖いのとで、とても真似ができなかった。

「ふん、咲夜の弱虫。まるで、女の子ね」

水丹の言うとおり、咲夜と水丹は性別を取り違えて生まれてきたのではないかと思ふくらいだった。

特に困ったのは着せ替えごっこだ。

水丹の部屋の箆筒たんすには洋装、和装問わずたくさん服が入っていた。特に当時はまだ珍しかった洋服は、きらきらと輝いていて綺麗だった。

彼女の父が娘に着せるために買ったものだが、本人は手軽な和装を好み、洋服に滅多に袖を通すことはなかった。

その代わりに、咲夜に着せたがった。

「まあ、咲夜ったら、西洋のお人形さんみたい」

水丹に言われれば、断ることもできない。

「お嬢様、……恥ずかしいです。ぼ、僕は男の子ですよ」

スカートは股下がスースーと風通しよく、落ち着かない。

女の子用の下着は、さらに心もとない。何より、鏡に映った

姿は自分でも見間違ふくらいに女の子だった。

「そんなの、瑣末なことよ。こんなに可愛らしければ、男も女も関係ないわ。わたくしよりもお洋服が似合うんじゃないの？
ほんと、咲夜は私よりもずっと可愛いわ」

水丹はそう言うが、咲夜は内心、水丹も綺麗だと思っている。おかつぱに切り揃そろえられた髪の毛は可愛らしく、和服に似合っている。また祖先に外国人の血が入っていると伝えられる此花家の娘らしく、目鼻立ちがはっきりとしている。

それこそ、和洋合わせたお人形のように育つだろう。

咲夜は同年代の子供をあまり見たことはないが、それでもたまに父の用事について外出することがあった。街の子供たちは総じて服もみすばらしく、涙はなをたらしたような子が多く、それに比べて水丹の容貌はすば抜けていると思っている。

水丹は、咲夜以上に同年代の子供と触れ合うことがないので、咲夜としか比較できないのだ。

(以下、省略)